

## 備前焼 ①土の章

日本先史古代研究会 会員 木村玉舟 (備前焼陶彫作家)

皆さん。こんにちは。私は山陽新聞社で陶芸を担当している、木村玉舟という者です。私の家は代々備前焼の窯元で、私で17代になります。本当は17代以上になるのですが、お寺の過去帳がやけたとかで17代を名のっています。豊臣秀吉が、備中高松城を水攻めに来た時に立ち寄ったと聞いていますからだいぶ古い時からやっていたのだと思って居ます。

さて、備前は日本六古窯と言って奈良時代からずっと、窯の火を絶やすことなく現在まで続けてきた唯一の焼き締め陶の産地です。六古窯とは「瀬戸」「常滑」「丹波」「信楽」「越前」「備前」を言います。備前焼は古代の須恵器の系統を引くもので、鎌倉時代に這い入ってより実用的で耐久力を持つ日用雑器として誕生しました。備前の水瓶は水が腐らないとして重宝され、すり鉢・壺・甕が作られました。今では備前焼は健康増進陶器として日本全国に名を轟かせる様に成っています。例えば備前のセラミックボールですが大きさは直径3cm位の玉でこれを5個位ウォーターポットの中に入れて水を一昼夜張っておくだけでなぜか水が塩素臭いも無くこれでコーヒー等入れて戴くと本当に素敵なコーヒーが出来上がるのが不思議です。又この玉を炊飯器の中に3個ほど入れてご飯を炊くとやはりふっくらとしたご飯が出来上がります。又備前焼のビールコップでビールを飲むと他には見られない程の細かい泡が出て、その上泡が消えにくくなって夏などは本当においしく戴けますし花入れの花は普通のガラスの花入れより倍近く長持ちします。又、大きな備前焼の器の中に、安い普通の酒とかウイスキーを入れてコルクでふたをして2週間置いた後、味わってみて下さい。お酒はまるやかさを増し特級の様なおいしいお酒が出来上がります。又、お風呂の中に備前焼花入れ等・2~3個入れて使うと2・3ヶ月たった頃アトピー性ひふ炎が軽くなったとか、はだか綺麗になって来たというデータも出て来ていますので備前焼は本当に現代人の久世主の陶器だと再確認させられて居ます。

さてその様な備前焼ですけれども昔から備前焼は一土、二焼、三作りと言う言葉が残っています。では如何、一土なのでしょうか。それは土(素材)だからです。今となってはこういう土は本当に手に入らなくなりました。お金を出しても買えない土、自分の足でかせで見つける土となってしまいました。



備前土の色の違い



山鳥の色が備前土の最高の物

私が今、使っている土は観音寺の土と下り松の土、それに牛窓の寒風の土と熊山(備前市)の土です。普通一般に使われている土は大ケ池の土、備前市内の到る所から出てくる、ひよせ粘土です。ひよせ粘土とは地球がまだ山と海だった頃、雨がどんどん降り続き川を作り海に泥、土を含んだ水がどんどん流れ込み、扇状地を作り、そこに細かい泥を何度も何度も積み重ねて有機物(原生動物・バクテリア)等を飲み込みながら出来上がった粘土の事です。こういう粘土ですから本当に粘りは日本でも例を見ない位粘く、手の中でぎゅっと伸ばせば、黒光りしながら金箔位うすく伸び皆さんが知っているものでたとえるならばガムの噛んだあとの粘さとバターをパンの上に伸ばす時の伸びやかさを兼ね備えた土だと思って下さい。例えば他の土だと、右に折り返した粘土を左に折り返すと土の粒子に亀裂が入り、ぽっくりと折れてしまいますが備前の土だと、そういう事はまず有りません。ですから備前の土では普通では考えられない程の形が作り出される事が出来るのです。

ただこういう土は作る時には最高なのですが土の中に含まれる成分から言えば問題が出てきます。それは鉄分1.5%~2.0%マンガン・マグネシウム等、金属元素を多く含む濃い粘土なのです。それとやはり作るうえでこれだけ細かい粘土ですので、製品になるまでの収縮率といったら又、備前の土は他土に例を見ない程、縮みます。だいたい日本の粘土は1.2割から1.5割とされていますがこの「ひよせ粘土」は充分2割は、縮みます。ですからでき上がった物が乾く時に一度、窯の中で炎に当たった年度が石(陶器)になる時にもう一度、ですからよほどゆっくり慎重に乾かし、ゆっくりと焼成していかないとこわれる原因になってしまうのです。

それと先に述べました鉄分等の金属元素が問題です。だからこの土、一種類製作しても良いのですが、今流行の備前の風

合いとも言うべき土味が出にくいのです。江戸末期から昭和 20 年頃までは備前焼が端正な形・陶器での金属写しが主流だった時期でしたのでこの土で制作した上にもっと鉄分の多い畠田の土を筆で塗ってブロンズ調に仕上げていた時期でした。畠田の土はその昔、備前長船の刀匠が刀の波紋を入れる時に使った土だそうです。土の中の鉄分含有量は 3.0%程有り、その為、耐火度が非常に低く、この土だけで成型すると、陶器が焼ける前にそのものが崩れ去ってしまうほどの弱い土です。あたかも食べ忘れたアイスクリームになってしまうのです。ですから「備前ひよせ粘土」で作った作品にこの畠田の土を塗る事によってブロンズ調の備前焼が一世をふうびした時期にはやりました。でも備前一千年の歴史から見るとやはり日本人、陶器でブロンズ調のものを作るより陶器なら陶器らしく素材の利点を大きく生かしてあたたか味のある素朴な土味を重んじた、日本人の心の奥底にある、畑・畦道・木の匂いが漂うような陶器がやはり備前焼だと考える様になって来ました。そうなる前に書いた様な粘土、例えば観音寺の土、下り松の土の出番成って来ます。でもその場所の土だからと言って又もや必ず良いとは言えません。ではどうすればいい土と悪い土の区別が出来るのでしょうか。それは土の色と味です。例えば観音寺の土色は山鳩の羽根の色が最も良いと言えます。少し紫かった灰色です。また、下り松の土はうす灰色の入った白土が良いと昔から伝わっていますし、味の方は無味でなくてはなりません。舌をさす様なまた、くさい臭いのする土は全て使い物にならない土です。私もそれは最近やっと解って着ました。そしてやっとの思いで手に入れた土は、まず露天に最低 5~10 年さらし土殺しをします。そしてはじめてその土を使えるようになるわけです。その土も現代の土粉碎机などで砕くとせっかくの土の成分が死んでしまいます。

ではどうすればいいか。それはやはり木槌で土を何日もかけて砕いてフルイにかけ必要のない大きな石は手分けして捨てていきます。この段階で粉碎机にかけると粉碎机の鉄のチップが土の中に紛れ込んだ必要のない石をむりやり砕いて固いソバリした砂が土の中に混じってしまいます。するとその土を混ぜる事によっておおらかなざっくりとした備前焼特有の土味が失われる原因になってゆくののです。ですからこうした手間・ひま掛かる作業を繰り返しながら土を作って行くのですから、信楽・瀬戸の土の数十倍の値段の土出来上がるのです。こうして出来上がった良い土を粘りの強いひよせ粘土をブレンドして行くわけです窯詰めの事・窯の中の火の回り方の事を考えて土作りは始まります。たき口などの火の強い所は下り松の土や寒風の土など 2割位入れますし、火の弱い所には観音寺の土を 3割位入れるという様にその都度ブレンドして行きます。備前の土というのは田畑 10m離れた所でも成分が違って来ますし、同じ場所で掘っていても地下 1mの所と 2mの所でも成分が違います。原土の色も層になって別れていますので目で見ても一見です。ですからその都度、テストピースで土質を研究しながら備前焼作家は土を作って行くのです。

備前の土もどんどん掘り続けてやがて無くなって行くのではという心配が頭を横切りますが、やはりそれは切実な問題です。本当に最近備前の“いい土”が無くなって来つつあります。ですから備前焼作家の方々も備前で使える“いい土”を求めて日本全国さまよひ始めました。私も旅のつれづれに各地の土を採取して日夜実験をくり返しています。例えば六甲山の土・これは鉄分が多すぎて、焼くと釘が溶けた様な鉄が噴出して来て使えません。又中国敦煌の土も使いましたが黄土系なので耐火度が低く物になりません。ではいい土はどこにあるのか、まずまず使え土・それは私の場合、愛知県長久手町の桃畑の山土・掘れば赤土・青土が出て来ますが、それが少し備前より固く焼けますが使えそうです。また東広島の西条の山土は下り松の土に少し似ていて使えそうです。また、他の作家の方はオーストラリアの土とか朝鮮の土とかフランスの土が、結構使えるとも言っています。このように土は備前の命、源そのものです。バルブ期のような粗製乱造は絶対・備前を衰退させるだけなので慎みたいものです。



この地図は下が北になります。木村さんの工房は大池の北側です